

今から41年前、イスラエルに発つ直前に、母方のいとこの達雄君が、饑別代りだといって、東京渋谷で〈つぼ焼きシチュー〉なるロシア料理をごちそうしてくれた。

大学1年の達雄君・19歳と、高卒直後のわたし・18歳が、その晚いったいどんな話をしたのか、今となっては、なにもおぼえていない。

しかし、クリームシチューの上に、パン生地で蓋をしたその一品に出会い、こんな可愛らしい料理を考案したロシア人に敬意を表したのは、はっきりおぼえているし、その数日後に横浜港からロシア船に乗ったとき、可愛らしさとはほど遠い、いかめしいロシア人に接して面食らったのも、記憶にある。

1968年4月上旬、ナホトカからハバロフスクを経て、数日後にモスクワに到着し、その後、モルダビア共和国のキシニョフという街に1泊した。当時は、インツーリストという公安旅行機構がきびしく、個人行動はなかなかできないといわれていたが、ホテルに到着後、散歩に出たわたしを追跡する者はいなかった……ように思う。

ホテルを出て少し歩くと、住宅街の路地裏があり、そこで青い目の子どもたちが縄跳びをして遊んでいた。ロシア語がわからなくても、縄を跳ぶことはできるはず。わたしは、子どもたちの廻す縄にずっと跳びこみ、大波小波を何度か跳んで、ずっと出た。

とりたてた感動もなかったし、子どもたちは、明らかに東洋人であるわたしを特別視するわけでもなく、夕暮れの中、そのまま縄を廻しつづけていた。遊びは、なにかを外す。

しばらく大波小波を眺めていたが、ふと、その中の10歳くらいの女の子に、「ピロシキ」(ロシア風の揚げパン)と発音して、食べる仕草をして見せた。

女の子は、自分の番を跳んだあと、わたしを近くの店に連れて行き、そこで棚に並ぶ、こんがり色のピロシキを指さした。そのとき、店の奥で〈つぼ焼きシチュー〉がテーブルに運ばれるのを目にしたのだ。本場のつぼ焼きは小ぶりで、蓋になったパン生地は白っぽくふわっとしていた。